

三上満さん ありがとうございます。

2015年8月21日に、本当に惜しい人と私達はお別れしなければなりません。1955年に東大教育学部を卒業されたあと、都内の中学校の教師となりました。テレビドラマ「3年B組金八先生」のモデルは、三上満さんであったことは有名です。

その後、労働運動や社会運動に精魂を込められ、その傍ら宮澤賢治の研究にも情熱を傾け、2003年「明日への銀河鉄道一わが心の宮澤賢治」で、第18回岩手日報文学賞・賢治賞を受賞しました。

2014年11月には、全国保育実践交流連絡会主催「秋の研修会」(in 大阪)では、病をおして「宮澤賢治からの明日へのバトン」と題して講演をしていただきました。

今回、前くわの実保育園園長の小河百合子さんが、「三上満との宮澤賢治の旅」のおりの貴重な体験と深い学びをまとめてくださいました。

「みんなのほんどうの幸い 探して」

秩父市 小河 百合子

三上満さんが旅立たれてから、何カ月もの月日が経とうとしている。

でも満さんの著書を読むと、満さんの声、あの優しく人を包み込む笑顔が浮かび、「満さんは私たちの心の中で生きています」と思う。

私は満さんの賢治三部作「明日への銀河鉄道 わが心の宮澤賢治」を再読し終え、「野の教育者 宮澤賢治」「賢治の北斗七星」へと再読を進めている。私の中では賢治さんが満さんだか、満さんが賢治さんだかわからない一体感で二人の人が存在している。

1976年、秩父地域の「さくら・さくらんぼ保育」を目指す保育園作りの運動の中で、くわの実保育園が認可保育所として産声を上げた。結婚相手が秩父の民主的医療機関で働いていたので、さくら保育園で6年間学んだばかりのわたしが、斎藤公子先生の援助を受け、つくり運動から関わり園長として働いた。29歳の若さで未熟さだらけだった私の苦勞物語の始まりだった。

私は両親を子どもの頃に亡くし、兄夫婦の援助で育った夫と、故郷青森から遠く離れた地、秩父で力を合せ、くわの実や学童保育に子ども達を預け、三人の男の子たちの子育てもしてきた。男の子の子育ては思春期はハラハラ・ドキドキがつきもの。その最中、地域の教育講演会で三上満さんのお話を聞いたのが、満さんとの初めての出会いだった。当時満さんは、「輝け子どもたち」「限りなく愛しいもの」などの著作で子育てへのエールを送っていた。

その日、講演会場に登壇した三上満さんは開ロー一番「みなさん、こんにちは」と元気に呼びかけた。しかし、会場の人たちの返事が実にか弱い声だったのを聞いてすかさず、「みなさん元気ありませんね。私がおもう一度出直しますよ」と、明るい人を信頼する笑顔で呼びかけた。これが満さんに憧れ、著書を読む始まりになった。満さんのたくさんの著書の中の「眠れぬ夜の教師のために」は、未熟な保育者の私を励ましてくれた一冊だった。

「普通の人が教師になるのに必要な四つの条件として、子ども達の前で、欠点も弱さも持った率直な人間でいること。しかし、何かひとつふたつ『これは』と言えるような要求を持った教師でいること。不完全であっても成長しようとする教師である事。そして仲間を支えられ、仲間と共に生きる教師である事。この四つです。」そして、教師を成長させるもの、きびしさの条件、子どもを愛するということ、子どもや子どもの可能性をどう見るか、などが書かれている。

私はこの本を10冊購入し、悩んだ顔の保育者や教師をしている保護者の方に「読んでみませんか」とさしあげていた。保育・教育の仕事をする人たちの「眠れぬ夜」の苦しさを人一倍体験した一人として、この

本は力になるに違いないと思った。

くわの実を60歳で定年退職してから、ムジカ音楽・教育・文化研究所の企画を通じて、再び満さんとの出会いが拓かれた。保育者時代、絵本や紙芝居で子どもたちに語ってきた宮澤賢治の作品の数々。しかしその世界は読み解けない難しさに満ちている。それを満さんの「賢治講座」「賢治の詩の講座」「賢治の旅」などで解りやすく、豊かに読み解いて頂く時間は至福のひと時だった。作品の朗読は自主的に分担し、たくさんの人の朗読を聞いて勉強できる時間ともなった。難しい漢字などを満さんに尋ねると、どんな文字も的確に教えて下さった。英会話もでき、ドイツ語で歌も歌い、絵も描く。学生時代の山岳部の経験で山の名前もバスの車中からたくさん教えていただいた。さくら・さくらんぼが目指す「全面発達の人」と、私は満さんを思っていた。

また、満さんはお酒を愛し、飲むとますます朗らかになり歌を歌ってくれた。「春へのあこがれ」「星めぐりの歌」。「交流会の最後はみんなて手をつなぎ、肩を組み「今日の日はさようなら」を歌い、名残を惜しんだものだった。

満さんは賢治の心友の保阪嘉内のお孫さんの新村美佳さんご夫婦、賢治の死後「賢治全集」の出版に教職を辞めてまで力を注いだ親友藤原嘉藤治さんの長男の嫁、藤原艶子さん、その地で艶子さんを支える「ポラーノの広場」代表の瀬川正子さん、小鹿野賢治会の人たちなど、沢山の人たちと私達を会わせてくれたのだった。人と人をつなぎ、出会わせてくれる絆の人だった。

2015年6月の「チャグチャグ馬コと賢治の青春の地へ」の旅は、満さんとの最後の旅になってしまった。満さんは15キロもやせてほっそりしたお体で、かすれた声を振り絞るように語り、「この声がなかなかいいと言われるんですよ」と笑わせ、賢治の故郷、山や川、碑や詩を語り歌ってくれた。健康を心配し支え続けている明子夫人も、いつものように参加されていた。満さんは出発の前々日に胃ろうの手術を受け「どうしても参加したい旅がある」と退院してこられたという。今思うと、最後の旅になるという覚悟で来られたに違いない。

賢治が歩いた外山高原を歩き、岩手山焼き走り溶岩流の賢治詩碑を見学して、いこいの村岩手に宿泊した旅の一日目の夕食交流会。思いがけず参加者一人ひとりが自分を語り、満さんや賢治を語った。満さんへの感謝の思いが、ふつくと会場いっぱい溢れた。私も満さんからの賢治の学びがあったからこそ「グスコブドリノ伝記」を保育学校で朗読したことなどを伝え、「鳥の北斗七星」から「祈り」(林光曲)をコーラスサロンの友人と歌った。

この旅で満さんにとっても初めて見る「チャグチャグ馬コ祭り」を車椅子に座って見物できたのだった。